

■ 修士論文要旨

戦前日本職工教育訓練史(1850~1931年)

—重工業を中心に—

The history of Japanese workers education
Focus on heavy industry

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

楊 世 睿

YANG, Shirui

■ キーワード

近代工業労働者, 教育訓練, 徒弟制, 実業教育, 養成工

要旨

本論文は、日本における1850年から1931年まで約1世紀の工場労働者訓練の歴史を整理し、近代工業の発展に伴う労働者訓練システムの構築のプロセスについて紹介する。この歴史の流れにより、近代日本の労働者訓練システムの形成背景、過程および影響について研究し、現代日本の労働者訓練システムの歴史的な源流を探ることを目的とする。

論文における研究方法は、資料研究である。日本近代の労働者教育に関する資料と工業発展の資料を調べ、工業職工の教育訓練の発展プロセスを解明する。また、近代工業労働者の技能の「熟練」養成について調査する。

本論文の構成は第1から第3章、及び結論の、4つの部分から構成される。各部分のおおまかな内容は以下に示す通りである。

第1章は親方・職人・徒弟制の退場と近代労務管理の登場について論じる。本章は、2節に分か

れ、第1節では、日本近代の製造産業の導入の際に、外国人技術者を雇用し、第一世代の日本人労働者を育成した実態について紹介する。第2節は20世紀前後の製造工場内の労務管理改革について紹介する。この改革は親方請負制を廃止し、労働者に対する間接管理から直接管理への変革であった。本節では、横須賀造船所と芝浦製作所の改革を比較し、改革の成否の原因を探った。

第2章は実業学校教育である。日本の戦前の労働者教育訓練システムは「二本柱」の構成となっている。すなわち、学校教育と企業教育という2つの「柱」である。学校教育は労働者教育の基盤である。本章は実業学校教育の展開をたどるとともに、具体的な実例を示した。実業学校教育の展開では、実業学校・実業補習学校・徒弟学校の発展と沿革について紹介する。また具体的な実例は、明治初期創設した東京職工学校を事例に、戦前日本の実業学校教育の内容を紹介し、その教育水準をみる。

第3章は、養成工へのみちである。養成工制度

は、戦前日本の最も代表的な労働者教育訓練制度であった。養成工制度の形成と定着の歴史を紹介する。第1節で論述する工場徒弟制は、養成工の前身として存在し、その内容、発展と特徴について紹介する。第2節の養成工制度では、養成工の出現、拡大と定着の歴史について紹介し、養成工制度形成の原因と発展のプロセスを記述した。最後の結論では、3つの結論を述べる。第1の結

論は、徒弟制度と養成工制度の区分について、技能伝習方式による区分の適切性を述べる。第2の結論は、戦前の工業労働者教育訓練の中心内容の変化に基づき、技能訓練の水準、方式及び規模について明らかにした。第3の結論は、現代の労働者訓練の歴史的源流を探すことである。戦前と戦後の労働者訓練を比較し、労働者訓練システムの相続性を明らかにする。